

執筆者紹介 List of Contributors

(アルファベット順)

藤本 悠 (同志社大学大学院文化情報学研究科博士後期課程在籍)

Yu Fujimoto (Graduate Student, Doctoral Degree Program, School of Culture and Information Science, Doshisha university)

奈良大学文学部文化財学科 (考古学専攻) 卒業、奈良大学大学院文学研究科 (地理学専攻) 修了、京都大学大学院文学研究科 (考古学研究室) にて1年間研究生として在籍、現在は同志社大学大学院文化情報学研究科に在籍。GISを中心とした考古学情報の処理についての研究を行っている。

福田 智子 (同志社大学文化情報学部専任講師)

Tomoko Fukuda (Lecturer, Faculty of Culture and Information Science, Doshisha University)

福岡女子大学文学部国文科卒業、九州大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。博士(文学)。九州大学大学院人文科学研究院助手を経て、現職。専門は平安朝文学。和歌文学会、中古文学会会員。

萩原健次郎 (詩人)

Kenjiro Hagiwara (Poet)

1952年大阪生 京都市在住

「セルロイド界限」「脳の木」「眼中のリカ」「萩原健次郎詩集」「k市民」、96年「求愛」で中原中也賞最終候補。99年「絵桜」で中原中也・小野十三郎両賞最終候補。02年「冬白」で小野十三郎賞最終候補。東京新宿「ピットイン」(共演・渋谷毅+ゲスト) はじめ全国各地で詩の朗読会に出演。パリ「マルシェ・ド・ラ・ポエジー」などでも朗読。

北尾 謙治 (同志社大学文化情報学部教授)

Kenji Kitao (Professor, Faculty of Culture and Information Science, Doshisha University)

1972年同志社大学文学部英文学科卒業。カンザス大学でTESOLの分野でM.A.(1974)とPh.D.(1977)を取得。現在、同志社大学文化情報学部教授。研究分野は英語教育と異文化間コミュニケーション。

黒木 香 (活水女子大学文学部助教授)

Kaori Kuroki (Associate Professor, Faculty of Humanities, Kwassui Women's College)

広島大学文学部文学科国語学国文学専攻卒業。広島大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学。修士(文学)。活水女子短期大学講師、助教授を経て、現職。専門は平安時代文学。中古文学会、中世文学会会員。

永野 友雅 (ニューヨーク市立大学大学院言語学研究科博士課程在籍)

Tomonori Nagano (Doctoral Program in Linguistics, Graduate Center, The City University of New York)

ニューヨーク大学(New York University)でTESOL修士修了。現在は、ニューヨーク市立大学ラガーディア校で、日本語基礎と言語学入門を担当しながら、自然言語処理技術の第二言語習得への応用を中心に研究している。

南里 一郎 (神戸女学院大学文学部非常勤講師)

Ichiro Nanri (A part-time lecturer, Faculty of Humanities, Kobe College)

九州大学文学部文学科卒業、同大学院文学研究科博士後期課程中退。修士(文学)。純真女子短期大学講師、助教授を経て、現職。専門は中古・中世の日本語学。日本語学会、訓点語学会会員。

西原 一江 (福岡県立福岡中央高等学校教諭)

Kazue Nishihara (Teacher at a high school, Fukuokachuo High School)

福岡女子大学文学部国文科卒業。福岡県立福岡中央高等学校教諭(国語科)。

ジョン・ソルト (ハーバード大学 エドウィン・O・ライシャワー日本研究所)

John Solt (Edwin O. Reischauer Institute of Japanese Studies, Harvard University)

ハーバード大学博士課程修了。Ph.D.を同大学から取得。アーモスト大学助教授(日本文学)などを経て現職。土方巽とともに暗黒舞踏という芸術ジャンルの確立に功績のあった大野一雄氏との交流は30年にも及び、この間様々な形で暗黒舞踏を世界に紹介してきた。

田口 詩織 (同志社大学大学院文化情報学研究科博士前期課程在籍)

Shiori Taguchi (Graduate Student, Master's Degree Program, School of Culture and Information Science, Doshisha university)

同志社女子大学学芸学部英語英文学科卒業。現在は同志社大学大学院文化情報学研究科に在籍。

田口 哲也 (同志社大学文化情報学部教授)

Tetsuya Taguchi (Professor, Faculty of Culture and Information Science, Doshisha University)

1976年神戸大学文学部文学科卒業、1980年大阪大学大学院博士課程中退。文学修士。同年高知大学人文学部に就任。大阪工業大学工学部を経て、1990年に同志社大学法学部に着任。言語文化教育研究センター教授を経て2005年より文化情報学部教授。同志社大学メディア・コミュニケーション研究センター副代表。

竹田 正幸 (九州大学大学院システム情報科学研究院教授)

Masayuki Takeda (Professor, Department of Informatics, Kyushu University)

九州大学大学院総合理工学研究科修士課程修了。博士(工学)。同大学工学部助手、同大学大学院システム情報科学研究院助教授を経て、現在、同大学大学院システム情報科学研究院教授。パターン照合アルゴリズム、データマイニング等の研究に従事。情報処理学会、人工知能学会会員。

田坂 憲二 (福岡女子大学文学部教授)

Kenji Tasaka (Professor, Faculty of Literature, Fukuoka Women's University)

九州大学文学部国文科卒業、同大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学)。九州大学文学部助手他を経て、現職。専門は平安朝文学。第14回日本古典文学会賞受賞。中古文学会、日本出版学会会員。

寺島 実郎 (財団法人日本総合研究所 会長・株式会社三井物産戦略研究所 所長)

Jitsuro Terashima (Honorary Chairman, Japan Research Institute・President & CEO, Mitsui Global Strategic Studies Institute)

早稲田大学大学院政治学研究科修士課程修了。三井物産ワシントン事務所長などを経て、1999年より三井物産戦略研究所所長。2001年より(財)日本総合研究所理事長、2006年同研究所会長。現在、三井物産株式会社常務執行役員。

山田 哲也 (同志社大学大学院文化情報学研究科博士後期課程在籍)

Tetsuya Yamada (Graduate Student, Doctoral Degree Program, School of Culture and Information Science, Doshisha university)

1983年大谷大学大学院文学研究科仏教文化専攻修士課程修了。文学修士。現在、財団法人今日庵(裏千家)今日庵文庫主任。茶の湯文化学会幹事。

矢野 環 (同志社大学文化情報学部教授)

Tamaki Yano (Professor, Faculty of Culture and Information Science, Doshisha University)

1971年京都大学理学部卒業。1976年同大学院博士課程修了。理学博士。同年埼玉大学助手、1995年同教授。2005年同志社大学教授。数理文献学、文化系統学、伝統文化論。数学会、情報処理学会会員。茶道学術文化賞受賞。

編集後記

文化情報学会の運営編集委員会は、2007年度からメンバーがかなり入れ替わった。創設以来、学会の開催、行事の流れ、雑誌の体裁のスタイルなどを決定していただいた前委員の方々の御蔭で、一応はスムーズに出発できた。その後の事を記録しておきたい。

田口委員の采配により、舞踏家大野一雄氏のビデオ鑑賞会を行った。当日映写されたビデオは整然とした舞台記録ではなく、手ブレも多い異様に臨場感のあるもので感動した方も多かったであろう。分野的に阪田委員との関係も深い。これに因みさる画像を表紙に使用しようとしたのだが、諸般の事情で断念した。大学の学会が発行する学術雑誌として、アカデミックな権利尊重とともに、芸術家の権利も尊重せねばならない。

大学院開設記念の講演会は学会共催であり、時期的な事情もあって大変盛況であった。

学会の大会で大学院後期課程院生による発表を得た。工学部や立命館大学 GCOE 関係の方の出席もいただき、活発な質疑が行われた。なおこの学会の折の特別講演については、次号で紹介予定である。大学院生の発表会はその後一度、前期課程院生も含めて行なわれた。その折には、日本文化への理解という点で考えさせられることも多かった。いわゆる“外人の日本理解”とも通ずるところがあるかもしれない。しかし、見識を伴い研究対象を論述上制限することと、業績のネタとして扱うこととはまた別である。精密と瑣末も似て非なるものである。

本誌の編集は主に高橋委員が担当した。これまでの体裁を継承しつつ、今回大幅な変更を行った。単なる印刷所としてではなく、編集者として御協力をいただいた創文堂印刷殿には一同誠に感謝している。時には、数時間で組版の体裁を変更したプルーフを戴いたこともあった。時代に相応しくデータは Online Storage でのやり取りであり、校正も PDF に直接行うなど、進んだ月刊雑誌並みの出稿・校正であった。

主な変更点としては、版面を決めたこと、縦書き原稿の部分に相応しい体裁にしたこと、フォントへの考慮などである。縦書きの部分では、正字や合字も取り入れ、柱を立てた。編集に入ってから慌てて整備せねば成らなかった事項もあり、投稿規程や査読体制の確立、投稿者への投稿要領の周知徹底などは今後の課題として残された。印刷所は伝統的に tiff, eps の画像を好む。ベクターな eps を tiff にするのは当を得ないこと、アウトラインを埋め込まないと印刷では異なるフォントで文字幅や間隔が異なる、など著者側が理解していないとトラブルが発生する。B 指定での太字は印刷に使うべきではなく、無用な影も邪魔である。英文の場合、ハイフネーションの忌避程度と語間調整処理とのバランスが難しい。このような二段組では一行の文字数が少ない為に様々な状況が起こる、日本語の場合はやむを得ず語間調整をすることもあるが、英語の場合は極力語間調整で行う (TeX の様に文末では若干広くすることもある)。著者側と編集・印刷側の齟齬が発生しないようにせねばならない。

来年度からは、年間二冊の発行とできるように、委員一同考えている。

(竹幽齋)